

# 菩薩としての細井平洲と平島町内会の今

大 崎 洋

## 1 はじめに

内村鑑三がその著『代表的日本人』の中で「上杉鷹山の師細井平洲は、名もない身分から責任ある地位に抜擢された、学者であり高潔の士<sup>(1)</sup>」とほめた江戸時代屈指の学者の一人であり、細井平洲（以下、平洲）は尾張国知多郡平島村（現在は東海市荒尾町）の出身である。平洲が鷹山を教育し米沢藩政再興の原動力となり、名古屋明倫堂の創立に当たり、初代督学として尾張の藩学振興、領民教育に大いに力を注いだことはよく知られている。その行動・存在は仏教における菩薩、わけても文殊珠利菩薩といえるものである。

毎年、平洲の月命日である5月29日（命日は6月29日）に行われる「平洲祭」において、出身地である平島町内会が、荒尾町神明社境内・西方寺での行事を主催している。

本稿は、平島町内会員に対し、アンケート「表2 平島町内会員への地域活動・幸福に関するアンケート」を実施し、菩薩ともいえる平洲の精神が平洲没後290年となる今、地域にどのように息づいているかをアンケート結果から考察したものである。

## 2 細井平洲について

### 2.1 平洲の生涯

平洲の生涯は「表1 細井平洲関係年譜」に示したが、江戸時代の学者の多くは、歴史の転換期に生まれ、非業の死を遂げるか、孤独のうちに生涯を閉じている。平洲は自ら築きあげた学問<sup>(2)</sup>を実践し、成功し、人々に親しまれ、尊敬されて生涯を閉じ、その功績は、今日なお東海市顕彰事業<sup>(3)</sup>として、引き継がれ、生きている。

平洲は享保13年（1728）6月28日、富裕な農家の二男として生まれ、享和元年（1801）に没した。幼い頃から、学問を好み、成人してからは、京都に師を求めて、勉学に励み、その後尾張で叢桂社という家塾を開く中西淡淵に師事する。師の勧めで、さらに長崎に遊学して中国語を学び、その後江戸に出て、宝暦元年（1750）、24歳の時、私塾「嚶鳴館」を開いた。はじめ、生活のために、江戸の町の辻々に立って、孝経や論語など、道徳や経済についての講釈<sup>(4)</sup>を行い暮らしを立てていたが、そのわかり易い話と、聞く人の心をとらえて離さない、真摯な語り口から、平洲の講釈は、次第次第に好評を博すようになったと伝えられる。

その後、平洲の教えは、講義・教条に走る当時の儒教界の中で、幸福を念頭においた徹底した実学の実践を説く内容であり、『嚶鳴

館遺草』<sup>(5)</sup>を著した。その頃、財政改革に迫られる諸藩に注目されるところとなり、宝暦3年(1753)、伊予西条藩主松平頼淳侯、その後、紀州藩主徳川治貞侯の師となったことを皮切りに、米沢の第9代藩主上杉重定に請われて14歳の養嫡子直丸(後の治憲侯 通称鷹山)の師となり、更には九州・人吉の相良彦岐守など多くの諸侯に迎えられた、その後安永9年(1780)、生まれ故郷の尾張の徳川宗睦侯に仕え、藩学を振興した。

晩年になってから、尾張藩という大藩へ仕官したことによる学者としての生き方の転換、体制側への批判精神の放棄、そして体制側に立った社会教育などの批判<sup>(6)</sup>などが一部あるものの封建制度の時代において、儒者として誰よりも人々の幸福を願って行動していたことは論をまたない。

## 2.2 尾張藩での功績

### (1) 藩校「明倫堂」の督学として

平洲は、「教ゆると申す事は政の最第一奉存候(天明6年湯浅新兵衛宛)」に見られるように教育を政治の中核に置くよう宗睦侯に提案し、「明倫堂」の基礎を固め、天明3年(1783)4月～寛政4年(1792)までであるが、督学を務める。宗睦侯が学問の大切さを広く教えるため、士族以外の百姓や町人に対して学校を身分の別なく利用できるよう開放した。

講義のある日は話を聴きに来る人がいつも定刻前から大勢押し寄せて、門前に市場ができる有様であった。熱田の魚屋達は、魚籠を門前に置いたまま、魚の腐るのも忘れて平洲の講義を喜んで聴いたという話も残っている。当時の狂歌に次のようなものがある。

「売れるものは、古文孝経(平洲が講義に使った本)、水口屋、能胆丸に小麦饅頭」、「あたるものは、水野権平、富十郎、学館総裁(即ち平洲の講義が大評判となったこと)、ふぐ汁にすし」<sup>(7)</sup>

(2) 継述館(資料編集所的な施設)総裁として、亡失したといわれていた『群書治要』(政治のかなめを説いた中国の書物)を刊行し、尾張藩学の水準を天下に知らしめた。

(3) 「廻村講話」により教育を社会教育にまで拡大

平洲の教育活動において私塾嚶鳴館や藩校明倫堂に拠った学生たちの教育と並んで、特筆すべきは領民に対する教育活動であり、町在教諭といわれる社会教育活動である。

すでに早く、嚶鳴館開創の頃から、平洲は街頭に立って辻講釈を行っており、それが藁科松伯に注目され上杉治憲の賓師に迎えられ緒口となった。それは生活上の一手段であったとしても、辻講釈という道を選んだ点に平洲の特色がうかがわれる。民衆に講釈を行ったのは、彼の信念に基づくものであって、単に職務のうえから行ったものではない。君主・役人・領民の三者一体となっておのおのがその本分を尽くさなければ、一国の政治が支障なく行われることはあり得ない。領民に分け隔て無く教育を施すことは、彼の平常主張するところであった。

「法度は墨がねものさし、役人は大工、下民は材木の如し材木なくば、いかで造作をすべき。又、墨がね良からず大工下手にて材木悪しくば、何をもって細工の手際を見すべき。されば墨がね、大工、材木三つ揃うようにとて、教学の道は、人君の貴きより下民の賤しきまで、第一のわざとはすることなり」

と「嚶鳴館遺草」第二教学で主張する<sup>(8)</sup>。

平洲は、藩民同志が互いに助け合うように、多数の善行者を褒めたり、藩内の村々を順番に講演して廻る「廻村講話」に取り組んだ。尾張仕官2年後、天明2年(1782)3月から藩命を受けて開始され、56歳の平洲にはかなりきついスケジュールであったと推察されるが、現在の岐阜市・春日井市・津島市・佐織町・尾西市・名古屋市などで実施した<sup>(9)</sup>。

『猿候日記』には

勝幡 三月十一—十三日 会衆一万五千三百人余、  
津島 同十五—十七日 同一万八千人余

鳥居松 同二十二—二十四日 同一万人余、岐阜  
四月一—五日 同五万人余<sup>(10)</sup>

という記録が残っている。藩庁への報告書には次の通りである。

「四月上旬細井甚三郎岐阜へ罷越し講釈の処、寺にてなり。殊の外繁昌の由。四月二日聴聞人数四千三十六人。三日同一万四千二百四十五人。三日夜同九百七十七人。四日二万三千七百八人。昼夜合四万二千九百六十六人」<sup>(11)</sup>

また、平洲の巡村講話の様子として、『護花関随筆』に

微声にては大勢に行きわたり申さず候に付大声にて申し聞かせ候、私及び助教とも幸いに大音にごさ候。一万人ばかりの人は、甚だ明瞭に承り届き候。甚だおかしき説法者、しわぶき一つつかまつる者もなし「湯浅新兵衛あて、天明六。九。十日付」

「細井平洲を起駅並びに山崎村兩地尾張中島郡に招待して孝経を講じた。三日間に近在遠近から参集聴聞の人数一万五千三百人余。引続き海郡木田村佐右衛門方に招かれ二日間に一万余。(略) すべて六か所にて十万人の講釈なり。みな一字をも知らぬ土民のみ。わずかに学問の志ある者は百が一にもあるまい。然るにかく競い集まり頭を傾け涙を落とし渴仰するは、この人の徳のゆえなるべきか」<sup>(12)</sup>

とある。平洲が尾張や美濃の各地の巡回講話を行った最初は、天明2年(1782)であった。講話が催された会場は寺院や地方の豪家を明け放ったが、あふれ出る聴講者のために会場が狭くて屋外まで数100枚の筵を敷いたということである。講話は1日に2回、3回と行われ、その内容は主として道徳と経済とであった。『護花関随筆』に

「中島郡の起村、山崎村(現在の尾西市)に平洲を

招いて講話を聞く、三日間であったが連続して遠くの村々から集まって、合計一万五千三百余人に達した。それから海東郡(現在の海部郡)木田村」の佐右衛門の家で講話のあった時も二日間で一万人、その後津島村では三日間で老人から若者、男も女も集まって合計一万八千人、春日井の鳥居松村でも、二日間に一万人余、岐阜では五日間に五万人、すべてを集めて六ヶ所で十万人余りの人であった。聞く者はみな、一字も知らない百姓が多く、わずかに学問のあるものはその百分の一にも過ぎないが、それが争って講話を聞き頭をかたむけ涙を流し、ただ感動するのは、平洲の徳のいたす所である。」<sup>(13)</sup>

と、平洲の血もあり、涙のあるこの巡回講話がどんなにか人々に深い感動を与え、人々が平洲の講話を強く望んでいたか、驚く外はない。

翌天明3年(1783)10月28日、29日の2日間、当時の横須賀町方玉林齋(現在の玉林寺)で講話をした。前庭には筵を何100枚となく敷き詰めて、両日で聴衆は7,700人に達した。尾張藩の勘定奉行であった人見が公用で知多郡、愛知郡に出張の序に平洲の講話の実況を目撃し、其の成績の顕著なのに驚いて、その時の状況を『人見文章』の中に記している。

十月二十八日平洲先生知多郡横須賀村に教諭す。余(人見王幾邑(きゆう))も農事奉行を兼ねる者なり、まさに横須賀を巡り、かたわらその状〔況〕を見むとす。講座の四隅尺地なくおよそ千五百人。先生席に上り孝経を講じ、例をひき天を詠じ地を語り、人を論じ神を説き、古今治乱のこと、報応利害のことを以てし、縦横自在、清泉の如し。衆男女泣き、笑い、口に仏号を唱え、銭を投げて合唱す。聴衆二千余り、近きは大里、朝倉、小倉より遠きは多屋、常滑よりす。寸席を余さず、庭上にむしろ三百余をしくも、なお後に至る者は席を得ず。堂前、門内、土に座る者数千百人、耳を垣につくる者数を知らず。先生座に登れば一団の和気、温言を以て衆を慰め、長を説き短を説き昔を語り今を語り、母の子をさとし父の子を戒しむるが如く、変幻百出、修めざる所なし、その

感通の極、泣き、笑い、為に賛し為に嘆く。先生時に戯言虐を交え、その言未だ尽きざるに、ついに三從慎身の道に帰して止む。(人見王幾邑、「明倫堂祭酒細井世馨、横須賀の民を諭告することを記す」)<sup>(14)</sup>

また、

紀徳民、如来と号す。俗称細井甚三郎。尾州の人なり。その州に仕え、民に講書して教えられし。聴く人感にたえず、仏菩薩の如く思ひて賽銭を投げしものあるに至りしとぞ。(小宮山昌秀著『楓軒俱記』卷二)<sup>(15)</sup>

とある。また、天明6年(1786)、九州人吉の儒者、平洲の門人の東子剛宛の書簡には

とかく町在教諭(一般庶民に対し講話をすること)は至極の善政にごさ候。いよいよ行われ候ようにと存じ候。庶民のいやしき者に誨え申し候は、随分人情に近く平語(一般庶民に対し講話をすること)にて「なむあみだ仏」と申す人のできるようにと申すこと専用(特に大切なこと)にごさ候。(東子剛 九州人吉藩の儒者、平洲の門人)あて、天明6.4.23日付)<sup>(16)</sup>

とあり、まさに平洲の精神・行動は、菩薩といえるのではないだろうか。

次に菩薩としての細井平洲について述べる。

### 3 菩薩としての平洲

菩薩とは、「さとりを求める人の」意である。生命論からいえば自己の徳性を發揮して他に尽くそうとする生命状態をいう。菩薩は、修業の結果、悟りの境地に到達し、極楽の仏国土に安住できるのだが、苦しみ迷う衆生のためにあえてこの世に留まって、仏教を広めようとしている存在とされる。菩薩という言葉は観音菩薩・弥勒菩薩などのほか、大乘仏教徒とのことでもあり、奈良時代には行基など、私度僧を含めて民間で崇められた僧を菩薩といった。そして最澄は具足戒の戒壇を不要と

し、大乘仏教の僧、すなわち菩薩僧は俗人また沙弥(入門僧)に授ける梵網經の菩薩戒のみで仏師(仏の弟子)として十分だとしたのである<sup>(17)</sup>。

諸經の王といわれる『法華經』は、日本仏教の根本精神を形成した經典である。文殊師利菩薩・弥勒菩薩など、数多くの菩薩が登場し、釈尊の教説が明らかにされる上での、重要な役割を果たしている

菩薩は六波羅蜜や、その他の数え切れない徳行を行ってきて次のように考える。

「私が行ってきたすべての善行は、一切衆生の利益のため、彼らを罪から究極的に浄化するためのものである。それら善行の功德により、一切衆生が様々な場所で味わっている無数の苦しみから解放されることを願う。それら善行を廻向することにより、一切衆生の避難所となり、彼らをその悲惨な存在から救い出したい。一切衆生にとっての大いなる灯火となって無知の暗闇を追い払い、智慧の光明を輝かせたい。」<sup>(18)</sup>

菩薩のための六波羅蜜について、波羅蜜は成就の意であり、彼岸(さとのり)の岸辺)に至ることである。菩薩の道をゆく者は利他(他者のために)を志して、次の六項目の成就を願う。

- ①布施=惜しまず与えること。
- ②持戒=戒を保持すること。
- ③忍辱=耐えしのぶこと。
- ④精進=努力すること
- ⑤禪定=精神を統一すること
- ⑥智慧=物事を正しく見て明らめること。<sup>(19)</sup>

菩薩の行を積むべき者のまず第1の心持ちは、忍辱の心を持つことである。忍辱とはどんなことがあっても、瞋らないことである。他人がどんなに迫害を加えても嘲笑しても瞋らないし、他人が褒めても少しも驕りたかぶることがないのが、忍辱の心をもつことである。

また、大乘仏教における菩薩は、自分の利益のためではなく一切の同胞の精神的幸福のために宗教的修業（利他行）に励む。そして成仏という宗教的理想を万人に解放した。すなわち、菩薩は自分の安寧を求めることはせず、俗世間のわずらわしい生活に身を投じて、無知と愚かな執着のせいで三界を永遠に輪廻し続け、人間としての究極のゴールに向かって何の努力もしていない大衆を救うため、全力を尽くすのである<sup>(20)</sup>。

出家せる比丘でも在家の国王官吏商人等誰でも、衆生済度の誓願を立てて利他行に邁進する人は菩薩である。求道者としての釈尊の姿を普遍化して我々衆生一般のあるべき姿と考へ菩薩行の思想を高揚した。泥沼に咲く蓮華がけがれに染まることなく、清らかであるのが菩薩の姿であるといわれる<sup>(21)</sup>。

菩薩でない人とは、自分の悟り、自己の救いばかりを考えている人である。自分だけがよければよいと考えて生きていても、決して満足できるものではない。

悩み多い生活をしている人々を教え導いて、そういう悲しい生活を脱出せしめたいという気持ちを「慈悲心」という。この慈悲の心持ちから世の中をもっと善くしようという決心が生じ、そうして世の中を善くするには、自分に世の中の人を助け救うだけの力がなければ、助けたり救ったりすることはできないのであるから、自分の修業をもっと励んでゆきたいと思う。この考へにたつものが菩薩である。人を救うため、世の中を善くするために自分の智慧をみがき、自分の徳をやしなっていくという心持ちで修業を続けるのが菩薩である。

菩薩の代表的存在は、文殊菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩、普賢菩薩などの大菩薩である。わけでも、文殊菩薩（文殊師利菩薩）は迹化の菩薩の上首で諸経に活躍する。一般に智慧の菩薩とされる。

文殊師利菩薩は、『法華経』では法王子（法

の王子）と称され、教法の後継者としての位置を与えられている。種々の大乘教典で諸菩薩を主導する場合が多い。空に立脚する智慧が文殊菩薩の特性であって、「文殊の知恵」といわれるように、特に般若經典の關係が深く、釈尊によってさかんに活躍しているほどである。過去の無央数（無限の過去にすでに悟りをえた）の仏たちはみな文殊師利の弟子であり、成仏に不可欠な般若波羅蜜を体現している文殊師利は諸仏菩薩の父母であるとされる。悟りの実践的側面を象徴する普賢菩薩と一対で、釈尊の左脇に侍して智慧を司り、智慧の威力を顕すために獅子に乗る姿で表現される<sup>(22)</sup>。

『法華経』「序品」では、まず実在の人物たちが聴衆として登場しているが、文殊師利菩薩から、以下に続く導師菩薩までは、その行徳から名を得た架空の菩薩たちである。放光端による不思議な光景を見た弥勒菩薩が、この奇端について文殊菩薩に問いかけている。文殊師利菩薩はこれまで多くの仏たちにつかえてきたので、きっとこの瑞相のいわれを知っているに違いないと思われたのである。文殊菩薩は此土他土の六瑞が『法華経』が説かれる前兆であることを明らかにする。また「序品」には、過去無量無辺不可思議阿僧祇劫のむかしに日月燈明仏があり、この仏時に妙光菩薩がいて、日月燈明仏の八人の王子を順々に教化した。妙光菩薩には800人の弟子があり、その一人が救名であった。そのときの妙光菩薩が今の文殊菩薩であり、求名という弟子が弥勒菩薩であるという。

さらに「提婆達多品」では、文殊師利菩薩が千葉の蓮華の車輪ほどあるものに坐して、大海の龍宮から釈尊のもとへ帰って来て、多宝如来に従っていた智積菩薩と問答する。そして釈尊に宝珠を捧げた功德によって龍宮の8歳の娘が成仏したことを現証している。さらに「安樂行品」では、迹化の菩薩を代表して、文殊師利菩薩が初心の菩薩の弘経のあり

かたを問いかけている<sup>(23)</sup>。

平洲こそ、菩薩わけても文殊師利菩薩といえるのではないだろうか。

次に、菩薩としての平洲を要約すると、は次の3点があげられる。

- ①人々の幸福を第一に考え、身分に関係なく「利他の行動」を実践し、巡村講話において、単に自身の雄弁で聴衆を満足させるではなかった。農村を廻って感心な者があるのを聞くと、その家を訪問して親切な言葉をかけ、時には慰め、時には励まし、時には賞金さえ贈るといった、平洲の人々を慈しむ「慈悲のこころは」はまさに菩薩である。
- ②『法華経』の「序品」には文殊師利菩薩は、800人も弟子があったと記されているが平洲も明倫堂督学として、また巡村講話により多くの人を教化し、弟子にしている。
- ③「提婆達多品」では、竜宮に赴き、8歳の竜女を化導している。封建社会にあって、女性は蔑視され教育さえ受けることができなかつたが、平洲は、年齢・身分・男女の区別なく教育を受けたい人に対しては、門戸を開放していた。

## 4 平島町内会の今

### 4.1 町内会の現状

平島町内会は370世帯(全世帯:460世帯)が加入しており、加入率は80.4%である。町内会の運営は22名(会長、副会長、20名の議員(組長))の役員会で議決・運営されている。町内会長は代々、東海市役所職員OBが勤めており、平洲祭の開催を始めとした行政との連携も比較的スムーズのように思われる。

町内会を牽引してきた青年団は約30年前に解散したが、町内会の団体は、子ども会、老人会(平和会)、女性会(旧農婦人会、現

在は平島女性部と平和会女性部の2つの団体)、太鼓保存会があり、地域活動は活発である。

町内会の主要行事として、2月:「平島公民館祭り」、5月29日:「平洲祭」の主催、8月:「盆踊り」、10月:「秋祭り」(子ども会の御神輿おみこしを中心)である。

特に年に一度の平洲祭は、平洲の精神を伝承することを確認しあう重要な行事である。地域社会の主役は老人と子どもであるが、その老人と子どもを大事にしないという社会は、存在が危ういものとなってしまふ。金儲けだけが生き甲斐になっていて、人間関係についてはできるだけタッチしたくないという考え方が社会に行き渡ってきているように思われる。

大きい共同体から小さい共同体まで、つまり国から地域、家族に至るまで、人々が共に暮らす場所、みんなで助け合って生きる場所という認識がなくなってしまうつつある。

かつて日本がもっていた知恵、人々の間に困ったことがある時に相談できるのは、必ず地域の高齢者だったという古くからの伝統があり、それによって高齢者は長く生きてきた自分の知恵を他の人、若い人のために提供できる、そういう高齢者を大事にする地域社会が理想であるが、「平洲祭」の主催をはじめ、各お祭りでの町内一体となった運営は、町内会長を中心になされており、平洲町内会は、古きよき伝統が残されている。

次にアンケート結果から菩薩ともいえる平洲の精神がどのように平島町内会に息づいているかを地域活動・幸福の項目でアンケートをお願いしたが、その結果から考察する。

### 4.2 アンケート結果から

町内会員100名にアンケートをお願いし、51名(男性:23名、女性:28名)の方から回答を得ることができた。結果は「表2 平島町内会員への地域活動・幸福に関するアン

ケート」の通りである。

全般としては、細井平洲という偉人を輩出した町内会員の意識は、他の地域との差はあまり変わらないように思われる。東海市は平成2年(1990)平洲没後190年を記念して『東海市民の誇り・細井平洲』を刊行し市内全戸に配布したが、今回のアンケートの自由記述では、平洲に関わる思いを1名も記入されていないかった。

しかし、「3名の町内会行事が多い」との意見があるものの、町内会長を中心に活発な地域活動が展開されていることが窺える。

【Q7 地域の子育てへの環境・協力】、【Q9 まちの魅力】、【Q10 心のバリアフリー】、【Q11 地域への愛着】、【Q12 地域に頼れる人がいる実感】、【Q13 地域での自分の役割】、【Q16 災害時の絆・助け合い】については、どの項目も、「感じる：10名前後、普通：30名前後、あまり感じない：10名前後」であった。

地域活動の基本は近所付き合いであるが【Q18 近所付き合い】は、「相談や助け合い(生活面で日用品の貸し借りや相談など)ができる程度：5名、たまに世間話や立ち話をする程度：31名、顔を見れば挨拶する程度：15名」であり、「ほとんど付き合いがない：0名」であった。【Q19 近所付き合い5年前の比較】では、「やや活発になった：10名、「あまり変わらない：35名、あまり活発になっていない：3名」であった。【Q20 地域活動への参加】では「経験あり：36名」と「経験なし：15名」を大きく上回っている。

【Q23 地域活動をしてよかった点】は「地域のためになっている：8名、友達ができた：10名、充実した時間が過ごせる：2名、近所の人との距離が縮まった：12名、その他として、「防災用品備品の状況がよく分かった、自分の子ども以外の子どもと話す機会が増えた」があげられている。

【Q24 地域活動で地域の人と交流することで幸福観(充実感)を得られたか】では、「感

じる：27名、何とも思わない：5名」であった。

【Q25 地域活動に参加しない理由】は「参加する時間の余裕がない：11名、興味・関心がない：4名、活動が自分に合わない：4名、人付き合いしたくない：5名」であった。

【Q28 町内会の活動】については「十分に活動している：35名、あまり活動していない：4名、わからない：12名」であり、約70%の人が町内会の活動を評価している。

【Q29 町内会活動が活発でないと感じる原因】は「町内会に対する住民の関心・意識が低い：8名、地域全体が高齢化している：7名、特に困っていないから：5名」があげられている。

【Q32 町内会の今後の課題】として「担い手の高齢化：38名、役員を同じ人がやっている：12名、新しい地域課題に対応できない：19名」であった。地域活動の高齢化はどの地域においても大きな課題であるが、60代で仕事をリタイアした人の獲得ターゲットに地道に地活動を取り組む以外に方法はないのではないだろうか。

【Q33 今後町内会が力を入れるべき活動】としては「親睦活動：14名、災害弱者マップの作成：14名」が主要な回答である。

幸福については、【Q25 一番幸福と思う(感じる)もの】、【Q26 一番幸福に感じる時(時間)】について質問した。多くの著書で個人における幸福とは、まず「健康」、「仕事」、「愛情」が基本であると記されているが、【Q25 一番幸福と思う(感じる)もの】については、「健康であること」、「家族の健康・幸せ」、「お金があること」、「仕事が充実すること、仕事がうまくいくこと」があげられていた。【Q26 一番幸福に感じる時(時間)】についての回答が多かったのは、「体調がいいと感じるとき」、「家族と過ごすとき」、「友達と過ごすとき」、「お金が貯まっているとき」、「趣味(音楽・スポーツ・読書)をしているとき」などである。

幸福について、人々がどの程度の幸福感を抱くのかは、その人の性格なり心理的な状況にかなり依存し、楽観的な人は幸福感が高く、悲観的な人はそうでもないといえる<sup>(24)</sup>という指摘がある。

健康であり、仕事や活動が生活に余裕があり、家族内が満たされていないと、地域に目を向けることはできないであろう。平島町内会員でのアンケートから、どこまで平洲の精神が継承されているかは推察できないが、「平洲祭」をはじめとする各種行事を主催する町内会長のリーダーシップがよく発揮されていることが窺える。

地縁組織のリーダーである町内会長に必要な資質を考えたとき、立場や肩書きはどうであれ、一地域住民として、人間らしい生活の場としての地域について、日常的に問題意識をもち、周囲の人に問題を投げかけ、地域の人々が当面している問題と自分が直面している問題とを結びつけて捉え、共通の問題として考え合うような努力が必要であるが、平島町内会長にその資質を見ることができる。

## 5 まとめ

生活の場である地域社会で、生活を支える基本的要素として住民相互のつながりを維持することが不可欠であるならば、町内会は大きな社会資本である。地域のすべての人に関わる暮らしの場で、すべての住民に開いた組織である町内会のもつ意味は今の時代だからこそ、大変大きく、貴重な存在である。

あくまでも地域活動は、地域に住む人がこの地域に住んでよかったと実感することが肝要であり、寛容の精神で心を開いて互いを知り、理解しあわなければならない。

そこには地域社会のあるべき姿を普遍的なものとしてイメージできる、何らかの目標としての人物の存在が必要である。

人々の幸福を願った菩薩としての細井平洲

は、平島町のソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の象徴ともいえる存在である。そこに住む人々の間で豊かなソーシャル・キャピタルが育まれている地域においては、当然様々な地域活動は活発であろうし、地域活動が低調なところではソーシャル・キャピタルもあまり豊かとはいえないだろう。

近年、とりわけ都市部において人口の流動性が高まるなかで、自治会・町内会の組織率が低下するなど、地縁組織型の活動によって地域社会のソーシャル・キャピタルを維持・形成する力は弱まっていると言われている。

平島町は平洲の出身地であり「平洲記念館」も存在し、多くの遺産が存在する。今一度、平洲の存在を振り返り、一人でも多くの人が平洲の精神で地域活動に取り組んでいくことが大切と思われる。

## 付記

本稿を作成するにあたり、アンケートにご協力して頂き、貴重なお話を聞かせて頂いた、細井時雄平島町内会長を始め、町内会員の皆様に感謝申し上げます。



表1 細井平洲関係年譜

備考：年齢は数え年

西紀	年号	年齢	区分	事柄
1728	享保 13	1	幼年 時代	6月28日、尾張国知多郡平島村（東海市荒尾町）に生まれる。
1735	〃 20	8		加家（荒尾町）観音寺の住職義親（或いは義寛 平洲の母方の伯父）に学ぶ。
1737	元文 2	10		名古屋に出て、師について学ぶ。
1743	寛保 16	16	修 業 時 代	京都に遊学、目指す良師を求め得ず、ひたすら読書自習に努めた。
1744	延享 1	17		京都から帰る、名古屋で叢桂社を開いた中西淡淵に入門した。
1745	〃 2	18		淡淵の勧めで、中国語を会得して詩文学を大成するため、長崎へ赴く。
1747	〃 4	20		母重体の報に接し、急ぎ尾張に帰るも、母はすでに逝去していた。
1751	宝暦 1	24		夏、江戸に赴き淡淵の叢桂社に入る。平洲、神明町に独立。
1752	〃 2	25	苦 悶 鳴 期 館 資 時 代 師 期	淡淵病没（44歳）。淡淵塾の人たちはこの後多く平洲の下に移った
1753	〃 3	26		年末頃、柳原に移居し、私塾を嚶鳴館と称する。
1754	〃 4	27		父楽翁（正長）江戸に来る。三家五姓の和、世間で評判になる。
1757	〃 7	30		「詩経古伝」の稿本を完成し自序を作る。刊行は2年後の宝暦9年。
1758	〃 8	31		西条侯松平頼淳が黄檗の僧大鵬禪師（中国僧）と対話しその通訳を勤める。
1760	〃 10	33		江戸火災で書物家財消失。西条侯松平頼淳の賓師となる。
1764	明和 1	37		「嚶鳴館詩集」を刊行。上杉治憲（14歳）の賓師となる。
1767	〃 4	40		嚶鳴館を改築。上杉治憲第9代藩主となる。
1769	〃 6	42		平洲の門人で米沢藩医師薬科松柏没（33歳）。
1771	〃 8	44		米沢へ行き講義。松島の勝景を見物した。
1773	安永 2	46	上杉家七重臣騒動起き、治憲肅正する。	
1776	〃 5	49	米沢学館新築完了、平洲、興讓館と命名。米沢へ行く。興讓館学則を書く。	
1777	〃 6	50	米沢藩内小松村にて領民男女を集めて講話。	
1778	〃 7	51	尾張藩侍医服部草玄（叢桂社同門）が執政人見弥右衛門の意向により平洲を訪ね、尾張藩に仕えるようにすすめた。	
1780	〃 9	53	督 学 時 代	尾張藩御儒者として召され、300俵を賜る。
1781	天明 1	54		八柱神社（東海市）に燈籠を献じた。名古屋に居住する。
1782	〃 2	55		江戸市谷合羽坂に邸を賜る。藩命により尾張美濃廻村講話を行う。
1783	〃 3	56		明倫堂竣工。明倫堂督学兼継述館総裁に任じられる。横須賀・鳴海で講話。
1784	〃 4	57		尾張中島郡起・美濃羽島郡足近村・安八郡墨股・同神戸・名古屋市内で講話。
1785	〃 5	58		明倫堂の東に聖堂を建てる。継述館総裁兼務を辞す。
1787	〃 7	60		「群書治要」校本完成。8月、石染を伴い郷里平島に遊ぶ。
1792	寛政 4	65		明倫堂督学を辞任する。後任は教授岡田新川（挺之）。
1796	〃 8	69		米沢へ行く。上杉候礼遇に力を尽くす。
1797	〃 9	70	70の賀宴。治憲始め東西の大家から寿詩を寄せられる。	
1799	〃 11	72	尾張藩主徳川宗睦没（67歳）。平洲嘆じて「わが事おわれり」と。	
1801	享和 1	74	平洲没す。浅草天獄院に葬る。法名、秀学院博清法徳淨道居士。	

東海市教育委員会社会教育課の資料に基づき作成

表2 平島町内会員への地域活動・幸福に関するアンケート

## 【プロフィール】

- Q1 年齢 30代：8名 40代：13名 50代：11名 60代：9名 70代：8名 80代：2名
- Q2 性別 男性：23名 女性：28名
- Q3 職業 自営業：5 社員：8名 公務員：4名 パート：25名 無職：9名
- Q4 世帯構成（ ）内に同居人数  
 単身世帯：6名 夫婦だけの世帯：11名 子どものいる核家族（3人：10名，4人：11名，5人：5名）  
 3世帯以上の同居世帯（5人：5名，6人：2名，7人：1名）
- Q5 この地域での居住歴  
 10年未満：8名 20年未満：10名 30年未満：12名 40年未満：9名 40年以上：12名
- Q6 住まい 戸建て：38名 マンション：11名 公営住宅：2名

## 【地域の子育てへの環境・協力】

- Q7 お住まいの地域に、子育て家庭に対して理解し、協力する雰囲気があると感じますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：10名 ・普通：32名 ・あまり感じない：9名 ・全く感じない

## 【買い物の利便性】

- Q8 お住まいの地域での買い物・お出かけなど交通の便が良いと感じますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：10名 ・普通：32名 ・あまり感じない：9名 ・全く感じない

## 【まちの魅力】

- Q9 お住まいの地域は学区外から人が訪れたい魅力のあるまちだと思いますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：6名 ・普通：30名 ・あまり感じない：15名 ・全く感じない

## 【心のバリアフリー】

- Q10 お住まいの地域には、困っている人を見かけた時に、声を掛けたり協力したりしやすい雰囲気があると感じますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：10名 ・普通：25名 ・あまり感じない：16名 ・全く感じない

## 【地域への愛着】

- Q11 お住まいの地域の文化や特色に愛着や誇りを感じますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：12名 ・普通：28名 ・あまり感じない：11名 ・全く感じない

## 【地域に頼れる人がいる実感】

- Q12 お住まいの地域に困ったときに相談できる人がいると観じますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：11名 ・普通：32名 ・あまり感じない：8名 ・全く感じない

## 【自分の役割】

- Q13 地域などで自分の役割があると観じますか？  
 ・大いに感じる ・感じる：10名 ・普通：31名 ・あまり感じない：10名 ・全く感じない

**【防犯性】**

Q14 お住まいの地域で、防犯への不安を感じますか？

- ・大いに感じる：1名　・感じる：13名　・普通：24名　・あまり感じない：13名
- ・全く感じない

**【交通安全性】**

Q15 お住まいの地域で、自動車や自転車などの交通事故の危険を感じますか？

- ・大いに感じる：5名　・感じる：23名　・普通：18名　・あまり感じない：5名
- ・全く感じない

**【災害時の絆・助け合い】**

Q16 災害時に近隣の人と助け合う関係があると感じますか？

- ・大いに感じる　・感じる：17名　・普通：25名　・あまり感じない：9名　・全く感じない

**【防災性】**

Q17 お住まいの地域は災害に強いと感じますか？

- ・大いに感じる　・感じる：11名　・普通：17名　・あまり感じない：18名
- ・全く感じない：5名

**【近所付き合い】**

Q18 あなたは近所の人とのお付き合いは次のどれに近いですか？該当するものに○をつけて下さい

- ・相談や助け合い（生活面で日用品の貸し借りや相談など）ができる程度：5名
- ・たまに世間話や立ち話をする程度：31名　・顔を見れば挨拶する程度：15名
- ・ほとんど付き合いがない

**【近所付き合い5年前との比較】**

Q19 近所の人とのお付き合いは5年間くらい前と比べて活発になりましたか？

- ・活発になった　・やや活発になった：10名　・あまり変わらない：35名
- ・あまり活発になっていない：3名　・活発になっていない：3名

**【地域活動への参加】**

Q20 あなたは地域活動に参加したことがありますか？

- ・はい：36名　　・いいえ：15名

Q21 「はい」と答えた人にお聞きします。それはどんな活動ですか？（複数回答可）

- ・町内会役員：13名　町内会長：2名　副会長：4名　会計：3名　子ども会：10名
- ・議員（組長）：4名　女性部：5名　民生：1名　・交通安全：4名　・防災会：3名
- ・スポーツ推進委員：1名　・NPO　・その他（　　）

Q22 「はい」と答えた人にお聞きします。地域活動をしてよかったですか？

- ・よかった：32名　　・よくない　　・何とも思わない：4名

Q23 問22で「よかった」と答えた人にお聞きします。地域活動をして何がよかったですか？

- ・地域のためになっている：8名　・友達ができた：10名　・充実した時間が過ごせる：2名
- ・近所の人との距離が縮まった：12名

・その他（防災用備品の状況がよく分かった。自分の子ども以外の子どもと話す機会が増えた。）  
 Q24 問 22 で「よかった」と答えた人にお聞きします。地域活動でお住まいの地域の方と交流することで幸福感（充実感など）が得られていると感じますか？

・感じる：27名 ・感じない ・何とも思わない：5名 ・わからない

Q25 問 20 で「いいえ」と答えた人にお聞きします。参加しない理由は何ですか、次のうちどれですか？（複数回答可）

・参加する時間の余裕がない：11名 ・興味・関心がない：4名 ・活動が無駄に感じる  
 ・活動が自分にあわない：4名 ・気が合わない人がある ・人付き合いしたくない：5名  
 ・住んでいる地域が好きでないから  
 ・その他（活動していることを知らない。活動を知る機会がない。）

Q26 あなたにとって一番幸福と思う（感じる）ものはなんですか？大切なものを5つ選び（ ）内に順位をつけてください。

順位	1	2	3	4	5	○のみ
仕事充実すること			3	7	7	6
健康であること	15	12	1			21
お金があること		4	22	1	4	7
夢が実現すること			1	8	3	3
家族の健康・幸せ	16	14	4			18
友達との付き合い			4	3	4	7
地域活動への参加				6		
ボランティア活動(地域活動を除く)への参加						
仕事もうまくいくこと			2	5	6	7
趣味(音楽・スポーツ・読書等)が充実すること		1	5	9	4	8
欲しい物が手にはいること	1				3	3

Q27 は 30 頁参照

### 【町内会の活動】

Q28 あなたの町内会は十分な活動をしていると思いますか？

・十分に活動している：35名 ・あまり活動していない：4名 ・わからない：12名

Q29 問 28 で「あまり活動していない・わからない」で答えた人にお聞きします。

町内会活動が活発でないと感じる原因は何ですか？該当するものに全てに○をつけて下さい。

・町内会に対する住民の関心・意識が低い：8名 ・活動への参加者が少ない  
 ・新旧の住民の交流が図りにくい：1名 ・集合住宅との交流が図りにくい：2名  
 ・地域全体が高齢化している：7名 ・住民に情報が伝わりにくい：1名  
 ・未加入世帯が多い：1名 ・特に困っていないから：5名  
 ・その他（子ども会以外のイベントはよく分からない：2名）

Q30 あなたの町内会の活動をあなたはどの程度知っていますか？

- ・十分知っている：6名
- ・ある程度知っている：31名
- ・あまり知らない：14名
- ・ほとんど知らない
- ・わからない

Q31 あなたの町内会の会員に対する情報発信は十分だと思いますか？

- ・十分である：14名
- ・足りない：11名
- ・わからない：21名

Q32 あなたの町内会の今後の課題は何だと思いますか？該当するものすべてに○をつけて下さい。

- ・担い手の高齢化：38名
- ・活動資金の不足：5名
- ・役員を同じ人がやっている：12名
- ・情報伝達と共有化が不十分：12名
- ・一般会員の意見が反映されにくい：5名
- ・女性が参加しにくい
- ・新しい地域課題に対応できない：19名
- ・特にない：5名
- ・その他（自治会に入会しない人が増える。退会者も増えた。後継者不足。）

Q33 今後、あなたの町内会が力を入れるべき活動をすべて選んでください。

- ・親睦活動（祭り・暑気払い・新年会等）：14名
- ・地域清掃：5名
- ・防災活動：18名
- ・防犯活動：9名
- ・交通安全活動：6名
- ・健康に関する事業：8名
- ・募金活動：1名
- ・災害弱者マップの作成：14名
- ・独自広報の作成：3名
- ・住民からの苦情の調整：5名
- ・会員への情報提供：8名
- ・スポーツ活動：4名
- ・高齢者支援：18名
- ・子育て支援：5名
- ・バザーなどの収益活動：1名
- ・リサイクル活動：3名
- ・小・中学校との連携：7名
- ・その他（ ）

Q34 町内会の活動にあなたが役立てたい特技が何かありますか？該当するものすべてに○をつけて下さい。

- ・学習支援：4名
- ・パソコン関係：5名
- ・大工仕事：2名
- ・料理：6名
- ・経理：2名
- ・語学・園芸：1名
- ・芸術・文化：11名
- ・スポーツ：3名
- ・その他（ ）

#### 【自由記述】（原文のまま）

1 町内会についての意見や要望（世代構成、活動内容、運営等等）

- ・高齢の人の為のもの充実も大切だが、子育て世代も大切にしてほしい。
- ・地域の祭りに関して、新しい意見が聞き入れられない。古くからいる人が勝手に決めるし、毎年少しずつやり方が違うためわかりにくい。
- ・町内会の行事が多すぎる。
- ・町内会行事が多く、整理する必要がある。
- ・できたら行事を減らして欲しい。
- ・各自治会の参加率が悪くなってきている。防災・高齢化・少子化等で相互協力の必要性が言われる中、どうすれば参加意識を高めていくかが課題である。
- ・時代が変化して、気候や世代構成も変わってきている。75歳以上の方が多くなり、敬老会の会場が狭くなってきている。若い世代の家庭も増えているが、仕事との兼ね合いで参加できないし、年配の役員の方との意見をすり合わせるのが大変だと思うと積極的にかかわる事に尻込みしてしまいます。

## 2 地域全般に関することで困っていること。

- ・不審者情報が最近多くなってきている。情報の直後は警察のパトロールがあるが、長く続かない。忘れた頃に何か起きては遅い。
- ・高齢化に伴い、町内会行事の運営が難しい。(30～40年前は50歳代の人を中心に役員組織ができていた。現在は70歳代が主で運営・体面で無理がきかない。)
- ・災害時の避難場所を全家庭の人がわかる様なマップを作って配付してほしい。
- ・若い世代の参加が少ない。どうしたら心良く参加してもらえるか、今後の運営にかかわるのでいつか困るのではないかと思う。
- ・年寄りと子どもの交流の発展

## 3 細井平洲先生に関わる思い

記述なし

Q27 あなたにとって、一番幸福に感じる時（時間）はいつですか？大切なものを10選び（ ）内に順位をつけてください。

	順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	○のみ
仕事をしているとき		4	2	1	1	1	1		4	1	2	2
体調がいいと感じるとき		10	6	3	5	3						20
食事をしているとき		2	3	4	3	3	5			2		10
料理をつくるとき			2	3	1	1	2	3		1	3	2
掃除をしているとき			2	2	4	3	2		4	1		1
入浴をしているとき				3	2	4	3	3	2	2		2
何もしないでボーッとするとき		3	1	1	3	2	5	3		2	1	13
睡眠のとき			4	2	1	4	3	5	4	2	2	14
セックスをしているとき							1					3
買い物をしているとき		4	1	2	3	1		4	2	3		
お酒を飲むとき			1	2		2	2	3	4	2	1	6
カラオケをするとき					1			3	3	4	2	4
友達と過ごすとき		2	3	2	4	3	1	2	5	1	3	15
家族と過ごすとき		7	5	4	3	2	5	1	3	2	3	17
お金が貯まっているとき		2		3		4	1		3	6	3	9
趣味(音楽・スポーツ・読書等)をしているとき		2	3	3	2		2	1	2	4	3	12
誰にも邪魔されず一人で時間を過ごすとき			1	1	2	3	2	3			4	11
他人に親切にしたとき(他人にお金・時間を使うことも含む)			2		1			2		2	2	8
各種パーティ・イベントに参加するとき					1						3	1
通勤時間中											2	
電話をしたり、携帯電話を触っているとき							1	2		1	2	
宗教活動に参加するとき								1				

## 注

- (1) 内村鑑三『代表的日本人』岩波文庫 1995 p55
- (2) 江戸時代中期の折衷派儒学者  
民の力、国の力を養うに有益であると考えれば、学派にこだわらずその説を取った。世に淡淵・平洲の学派を折衷学派というのはこのためである。  
島田英明『歴史と永遠 江戸後期の思想水脈』2018 岩波書店 p218  
折衷派の巨魁と目される細井平洲は、「一家の学を興し候程の人は、何れ共に一世の豪傑」なのだから「長を用ひ短を捨て申候はば、何れ利益の無之学も有之間敷候」であり、「今の世に生まれ候人は、一統にむかし生まれ候人の弟子」であることを忘れるべきではないとした。
- (3) 平洲を生み、平洲を生んだ東海市は、平洲を郷土建設の柱としている  
明治 33 年 (1900) 小島新吉、平洲顕彰会を組織し、平洲 100 年祭を執行  
明治 43 年 (1910) 上野村平洲会設立。同会により平洲 110 年祭を執行  
昭和 49 年 (1974) 平洲ゆかりの地である神明社境内に東海市立平洲記念館設立  
平成 2 年 (1990) 平洲没後 190 年を記念して『東海市民の誇り・細井平洲』を刊行、市内全戸に配布する  
平成 7 (1995) 年 東海氏が「21 世紀の人づくり心そだて」を統一テーマにして平洲サミットを開催、山形県米沢市・群馬県太田市・長野県木曾福島町・和歌山市・山口県防府・熊本県人吉市が参加  
平成 8 年 (1996) 第 1 回平洲賞エッセイ募集(テーマ:先生)。米沢市でサミット開催。  
以後、毎年、平洲賞・サミットを開催  
平成 12 年 (2000) 平洲没後 200 年。平洲賞・サミット・平洲記念館増築オープン。鷹山と平洲の関わりから、山形県米沢市と東海市が姉妹都市提携  
平成 19 年 (2007) 嚶鳴フォーラム開催。以後毎年開催
- (4) 浅井啓吉『平洲先生一日一語』1975 愛知県郷土資料刊行会 p104  
「皆よう聞かっしゃれ。学問というものは、いかいこと書物を読んで、その書物にあることを、こう
- いうことはこの道理、こうあることはこのわけと、その書物の上で合点して、よいことと悪いこととう道理をわけること。」(聞書)
- (5) 経世済民への道を開設した細井平洲の教えて、平洲の没後 33 年経った天保 6 (1835) 年に、彼の弟子であった伊予西条藩士・上田雄次郎が、平洲と生前親交のあった諸侯たちとの間で取り交わされた書簡並びに平洲の学塾であった嚶鳴館での講義録などをとりまとめ、刊行したものである。『嚶鳴館遺草』の中で伝えられることは、真の人としての幸せは何か、そのために人はどのような生き方をしなければならぬか、政(まつりごと)を行う目的は何か、そのためには、上に立つ指導者はどうあらねばならないかという課題に対する平洲の様々な教えが著されている。全 6 巻でかなり、巻の一 野芹 上中下・巻の二 上は民の表 教学 政の大体 農民の心得・巻の三 もりががみ 対人之間忠 建学大意・巻の四 管子牧民国字解・巻の五 つらつらぶみ・巻の六 花木の花 本末 対某候問書・付録 与権世偽手簡、からなる。吉田松陰は「この書にまさる経世済民の書はない」と語り、西郷隆盛は「政治の道は、この一書に尽きる」と断言した。当時の人々に大きな思想的影響を与えたと言われている。
- (6) 篠田竹邑『細井平洲の教え 嚶鳴館遺草』文芸社 1999 p7
- (7) 東海市史編纂委員会『東海市史 資料編第 3 巻』東海市 菱源印刷工業株式会社 1989 p4
- (8) 小西重直『嚶鳴館遺草』成文堂 1941 p41  
皆川英哉『現代語訳 嚶鳴館遺草』ケイアンドサイ 1991 p74
- (9) 東海市教育委員会『東海市民の誇り 細井平洲』細井平洲没後 190 年記念出版 1990 p58
- (10) 浅井啓吉『平洲先生一日一語』1975 愛知県郷土資料刊行会 p104
- (11) 浅井啓吉『細井平洲の生涯』1985 丸善名古屋出版サービスセンター pp259-260
- (12) 浅井啓吉『平洲先生一日一語』1975 愛知県郷土資料刊行会 p177
- (13) 東海市史編纂委員会『東海市史 資料編第 3 巻』1989 東海市 菱源印刷工業株式会社 p42
- (14) 大角修『法華経の辞典』春秋社 2011 p173
- (15) 浅井啓吉『平洲先生一日一語』1975 愛知県郷土資料刊行会 p77

(16) 菩薩としての細井平洲と平島町内会の今

- (16) 同上書 p81
- (17) 鈴木大拙『大乘仏教概論』岩波文庫 p380
- (18) 大角修『法華経の辞典』春秋社 2011 p93
- (19) 鈴木大拙『大乘仏教概論』岩波文庫 pp292-293
- (20) 立正大学日蓮教学研究編『日蓮宗読本』 p24
- (21) 渡邊寶陽『法華経の事典』東京堂出版 2013 p382
- (22) 同上書 p383
- (23) 同上書 p383
- (24) 橋本俊詔・高松里江『幸福感の統計分析』岩波書店 p187

### 参考文献

- 蒲田茂雄『法華経を読む』講談社学術文庫 1994
- 後藤大用『法華経への菩薩道』山喜房佛書林 1970
- 菅野博史『法華経 永遠の菩薩道』大蔵出版 1993
- 菅野博史『現代に生きる法華経』第三文明社 2009
- 東海市教育委員会『現代に生きる細井平洲』1989
- 東海市教育委員会『細井平洲絵巻』  
細井平洲没後 200 年記念事業実行委員会 2000
- 東海市史編纂委員会『東海市史 資料編第 3 卷』1989
- 童門冬二『上杉鷹山の師 細井平洲』集英社文庫 2011
- 童門冬二『細井平洲の人間学』PHP1993
- 中田実・山崎丈夫・小木曾洋司『改訂新版  
地域再生と町内会・自治会』自治体研究社 2017
- 二宮隆雄『細井平洲』PHP1995
- 法華経普及会編『法華経並開結』平楽寺 1923